助動詞「る・らる」確認テスト（受身・尊敬・自発・可能）　解答・解説

■ 解答・解説

問1 意味＝**受身**。根拠＝「君に召されて」は「主君にお呼び出しになられて」で、「君に（＝主君によって）」という動作主を示す「に」があり、呼ばれる側の動作だから受身。

問2 **連用形**。下に接続助詞「て」が続いているので連用形「れ」。

問3 (1) **受身**。 (2) 「思はぬ人に文を見られて」は「思いもしない人に手紙を見られて」で、「人に（＝人によって）」という動作主を示す「に」があるから受身。「（だれ）に」があれば受身、が定番。

問4 「見る」は**上一段活用**の動詞であり、四段・ナ変・ラ変のいずれでもない。「らる」は四段・ナ変・ラ変**以外**の未然形に接続するので、「見る」の未然形「見」には「る」ではなく「らる」が付き、「見られ」となる。

問5 意味＝**自発**。根拠＝「昔のこと思ひ出でられて」は「昔のことが自然と思い出されて」で、「思ひ出づ」という心の働きをあらわす語に付き、「自然と〜される」の意味になるから自発。

問6 (1) **自発**。 (2) 「思ひ知る（しみじみ感じる）」という**心情語**に付いており、さらに「おのづから（自然と）」という語があるので、「自然と恋しく思われる」という自発の意味になる。心情語＋「おのづから」は自発の典型。

問7 **終止形**。文末で言い切っているので終止形「る」。

問8 意味＝**尊敬**。根拠＝主語が「大臣」という敬意を払うべき人物で、「内裏に参り給ひて、帝に拝せらる」と動作主への敬意を表しており、「お拝みになる」と訳せるから尊敬。（「帝に」は拝む対象であって動作主ではない点に注意。）

問9 「拝す」は**サ変（サ行変格）活用**の動詞で、四段・ナ変・ラ変のいずれでもない。よって未然形「拝せ」には「る」ではなく「らる」が付き、「拝せらる」となる。

問10 意味＝**尊敬**。根拠＝主語が「殿」という高貴な人物で、「御粥など参らるる」は「お粥などを召し上がる」と訳せ、動作主（殿）への敬意を表すから尊敬。

問11 **連体形**。理由＝「御粥など参らるる」は、係助詞「ぞ」（例文⑥前半「今ぞ」）の結びにあたり、連体形で結んでいる。（「ぞ」の係り結びにより連体形「るる」となる。）

問12 意味＝**可能**。根拠＝「いかに深くとも、馬にて渡らるべし」は「どんなに深くとも、馬で渡ることができるだろう」で、「〜できる」という可能の意味になるから。（中世以降、可能は打消なしでも用いられる。）

問13 （訳例）「これほどの川は、どんなに深くても、馬で**渡ることができる**だろう。」

問14 意味＝**可能**。根拠＝「物も食はれず」「まどろまれず」は、下に**打消**「ず」を伴って「食べることもできず」「うとうとすることもできず」の意味になるから。下に打消があれば可能、が定番。

問15 「見る」は**上一段活用**で、四段・ナ変・ラ変のいずれでもない。「らる」は四段・ナ変・ラ変以外の未然形に接続するので、未然形「見」に「らる」が付き、「見られず」となる。

問16 意味＝**自発**。根拠＝「をかしと思ふ折はおのづから笑まるる」は「おもしろいと思うときは自然とほほえまれる」で、「笑む」という心の動きに付き、「おのづから」もあるので、「自然と〜される」の自発。

問17 意味＝**受身**。根拠＝「人に『あやし』と言はれて」は「人に『変だ』と言われて」で、「人に（＝人によって）」という動作主を示す「に」があるから受身。

問18 (1) 受身の助動詞「る」の**終止形**。「言はる」は動詞「言ふ」の未然形「言は」＋助動詞「る」で「(人に）言われる」の意味。 (2) 完了（存続）の助動詞「り」の**連体形「る」**。「咲ける」は動詞「咲く」の已然形（命令形）「咲け」＋「り」の連体形「る」で、「咲いている（春)」の意味。両者は付く語（受身「る」は未然形接続、完了「り」は四段已然形・サ変未然形接続）も意味（「〜される」か「〜した・〜している」か）も異なる。

問19 意味＝**自発**、活用形＝**連体形**。「春来れば、まづ花のことぞ思ひやらるる」は「春が来ると、まず花のことが自然と思いやられる」で、心の働きに付く自発。係助詞「ぞ」の結びで連体形「るる」になっている。

問20 「る」が付いているもの＝**例文⑬「聞かれず」**（「聞く」＝四段活用）と**例文⑭「書かるべし」**（「書く」＝四段活用)。例文⑨「見られず」は「見る」（上一段活用）なので「らる」。

問21 **ア・ウ・オ**。「る」は四段（ア 思ふ)・ナ変（ウ 死ぬ)・ラ変（オ あり）の未然形に付く。イ 受く（下二段)・エ 見る（上一段)・カ 寝（下二段）には「らる」が付く。

問22 （解答例）イ「受く」は**下二段活用**で、四段・ナ変・ラ変のいずれにも当たらない。「らる」は四段・ナ変・ラ変**以外**の未然形に接続するきまりなので、「受く」の未然形「受け」には「る」ではなく「らる」が付き、「受けらる」となる。(エ「見る」上一段、カ「寝」下二段も同様に「らる」。)

問23 活用の型＝**下二段（活用）**型。「る」の活用＝**れ・れ・る・るる・るれ・れよ**（未然「れ」／連用「れ」／終止「る」／連体「るる」／已然「るれ」／命令「れよ」)。

問24 （解答例）「す・さす（せ・させ)」は**使役（〜させる)**・尊敬の意味を持つが、「る・らる」には**使役の意味はなく**、受身・尊敬・自発・可能のいずれかにしかならない。よって、ある語に付く助動詞が使役の意味かどうかで「す・さす」か「る・らる」かを区別できる。例文①「召さ」は動詞「召す」自体、例文⑥「起きさせ給ひ」の「させ」は使役（または尊敬）の「さす」で、「る・らる」とは別の助動詞である。

問25 （整理）**受身**＝①「召されて」・⑪「言はれて」／**尊敬**＝⑤「拝せらる」・⑥「参らるる」／**自発**＝③「思ひ出でられて」・④「思ひ知らる」・⑩「笑まるる」／**可能**＝⑦「渡らるべし」・⑧「食はれず／まどろまれず」。

問26 （解答例）すぐ下に打消の語（ず・じなど）があり、「〜することができない（できる)」という意味になるとき、「る・らる」は可能と判断できる。

問27 （解答例）「思ふ」「思ひ出づ」「思ひ知る」「笑む」など心の動きをあらわす心情語に付き、「おのづから（自然と)」とともに「自然と〜される」という意味になるとき、「る・らる」は自発と判断できる。